



抜根事業に若い力が加わった

本年春、りんご園には雪害が多くみられ、抜根作業は合計560時間と、昨年比1.4倍であった
そんな折、頼もしい若手組合員が抜根事業のメンバーに仲間入りをした

友人の依頼があると個人的に抜

根を請け負ってきた清野さん。去年、当JA職員から田んぼの溝切り作業に誘われ軽い気持ちで参加したという。作業中に職員と交わした雑談がきっかけで、それまで親交のなかった成田光生さん、成田光弘さんと話す機会が設けられた。

抜根作業が厳しくなってきたと光生さん。清野さんは、それならやはり、自分がやってみようと思いい「わあが仕事覚えるまで、まだいできる？（僕が仕事を覚えるまで、まだいしてほしい）」と伝えた

そつた。

清野さんの取材に伺った日は、五所地区の成田守さんの園地での作業であった。

守さんは「労働力に合わせて園地作業の集約化をしよう」と依頼した。清野さんとは初対面だけど、抜根した穴の段差をなくすように土を踏み固めてくれるなど、新人でも心配りが行き届いた丁寧な仕事に関心しています。大変助かります」と話していた。

一方清野さんは、今は覚えることと、安全に作業を進めることで



樹をアームで抑える作業

頭がいつぱいだという。抜根した樹を園主がチェーンソーで切りやすいようユニボのアームで抑える作業では、自分の腕を少し動かしただけでアームが横に振れてしまいうため、大きな怪我に繋がる危険性がある。

現在の抜根担い手

(当JA伐根事業歴)

- 黒滝 成田光生さん(約43年)
- 相馬 成田光弘さん(約10年)
- 紙漣沢 清野大輝さん(1年目)

そのようなことが無いよう、全ての作業を安全に終わらせることに集中している清野さんの姿勢に頼もしさを感じた。

「20歳の頃にはもう抜根をやっていたから、少なくとも43年は続けていることになるな」

そう語ってくれたのは成田光生さん。

前ページで特集した、相馬村りんご品種更新推進協議会に付随した抜根作業の立ち上げ当初から、この事業を担ってきた。抜根を請け負うには、個人でユニボを持っている必要があるが、光生さんは就農当手を振り返って、

「高校卒業してすぐの孫が就農したとあって、当時JA理事だった祖父が、必要なものを揃えてくれたからユニボも持っていた。若い孫



慎重な操作で作業を進める光生さん

■ ■ ■

「もう一人の担い手は、成田光弘さん。光弘さんは仙台で農機メーカーに勤務していた頃、70tダンブに乗っていたこともあり、コンボの操作はお手の物。お父様の年齢を気遣いUターンして就農してからは個人的に抜根を請け負っていたが、10年ほど前からJA抜根事業の一員となった。」

「(コンボの)トラックへの積み下ろしを1日に10回ほどやることもあるけど、夕方になり集中力が切れてくると危険。抜根は安心安全が第一。園主の人に喜んでもらえることに、とてもやりがいを感じている」

光弘さんが作業していたのは、雪害で折れてしまった樹の抜根を依頼した宮川明彦さんの園地。



光弘さん(左)と宮川さん園主との信頼関係に熱いものを感じた

■ ■ ■

「抜根は誰にでも頼めるというものじゃない。こういう人だから信頼して頼めるんだよ」

根を「か所にまとめたり、地中に根が残らないよう掻き出したりと、その丁寧な仕事によって信頼されているのだと分かった。」

大場組合長はこう語る。

「抜根はJA事業の中でも特に、農家のみなさまに喜ばれている。依頼料のおよそ半分をJAで負担していることから、業者に依頼するより組合員負担が少ない点と、なにより同じ農家なので、後工程まで理解して作業にあたってくれる点が当事業の一番の強み。担い手の方々には組合員の畑もよく知っており、地域の信頼も厚い貴重な人材。今後の清野さんにも期待している」

■ ■ ■

一言に抜根と言っても、農地の若返りや整備、労働力の集約化などさまざまな目的があり、この事業には先人の苦勞やりんご作りの歴史が深く関わっていました。

また、若い担い手誕生のきっかけは、交流でした。

「コロナ禍以降、そうした交流の機会が減っていますが、清野さんのお話にあった溝切り作業のよつこ、集まって農作業をする場所へ新しい人を誘ってみることは、地域農業の可能性を広げることに繋がるかも知れません。私たち二人一人の声掛けが、地域の未来を作ります。」